

噫、木茂先生

森 仁史

青木茂先生は小生のようなアカデミクな美術史研究の場を経ずに調査研究に従事していた者にと てほとんど唯一の師であり 常に導きの糸であ た しかし コロナ禍以降 お目にかかることもできないまま終わ てしま たことは 悔やんでも悔やみきれない 墓前に向かう日に寄稿の依頼を受けたのは千載一遇の天恵と受けとめ、学恩にわずかでも報いておきたい

1 人となり

青木さん 皆が青木先生を生前そう呼んでいた言い方に従います。(に会った人なら誰でも、その親しみやすくだけた口調に魅せられたことだろう しかも と重要なことはその語り口がただ聞いて面白いただけではなく 内容が作品の評価や自分の見解として学界の大勢とか世評にとらわれない 全く妥協のない本音ばかりであ たことである もちろん それは木茂先生だけでなく青木さんが会長を務めた明治美術学会の美点だと言っておかなくてはならないが、その源が青木さんの姿勢に発していたことは疑いないところだと思っ かく言う小生もす かり青木節に魅せられ 明治美術学会の宴席で金曜の昼頃古書会館に来てみると声をかけられたのが始まりで 以後永くお付き合い願うことにな た 同館向かいの喫茶店には、獲物を手にした木茂先生の周りに丹尾安典 大谷芳久をはじめ 岩切信一郎 金子一夫 森登 山田俊幸 村田哲夫ら後の一寸同人が集い 丁々発止と気炎を上げる末席に加わることにな た しかし その姿勢は最初からではなく 東京藝術大学 以下 芸大 から神奈

川県立近代美術館 以下 鎌近 に移ってからだと奥さんから聞いている (後述

青木さんは本人がしばしば語っていたように郡上八幡の生まれではない その東隣に位置する西和良村という和良川沿いに集落の点在する山あいの村の一隅に生まれた。彼が小学生のころだけに、足に大けがをして大八車で下呂の骨接ぎまで運ばれ 医療の整わない戦前だ たら 東海地方では効き目があると非常に評判の高か た下呂軟膏を貼ってもらって、治したと聞いたことがある 小学校の時からたいへん利発だ たようで 複式学級だ た村の小学校の教室では、先生から他の生徒の授業の邪魔をしないように 皆から離れて教室の隅で「茂はあ ちむいて一人で勉強してろ」と言われるような少年だ たらしい

小学校をおえてから 西和良村から一番近い岐阜県武義中学に進学したこのことである 西和良村から同校のある美濃町へは郡上八幡まで出て そこから越美南線に乗らなければならなか たので、下宿生活となった。利発なだけではな きたいへんいたす小僧だ たらしく 同じく下宿していた学生と示し合わせて 庭に丹精して育ててあ た牡丹の花を咲いたところで全部切り落としたことがあ たと聞いた。疎開していた日本画家が画題にするために大切に育てていたものを彼の鼻を明かしてやりたいがためだ たという この旧制中学在学時に敗戦を迎えた 今まで聖戦遂行を全員が固く信じていたのに ひどく裏切られた気がしたそうだ それで たまたま岐阜県にも昭和天皇が行幸してくることを知り 年長の先輩ら数人とともに抗議してやろうと意気込んで天皇の通る沿道に並び 待ち受けた しかし いざ天皇が通りかかると 真っ先にその先輩が手をつけて土下座してしまい 自分も同じように頭を下げたんだと聞かされた その語り口は自分もその場において緊張して待ち受けた気分になるほど リア

ルだ たが 当時の腕白中学生の意思なんてそんなものだ たんだと なかば自嘲的な笑い話のように語り聞かされた

青木さんは東京芸大に就職してから だいぶ長い間登山が趣味だ た 一人でなく職場の経験のある人と登ったようだ。普通の登り方では面白くないと地図の上にランダムに一直線を引き 道がなくても 登山ルトがなくても その通りに歩くというような登山もしたようだ。常識にとらわれず 実験に挑戦したという気分の方が勝っていたのだろう。ただ、長く登山をすれば 野外調理は避けられないのだが 青木さんは全く台所仕事ができなかつた。た コ ヒ が大好きなだけけれど 粉末のインスタント以外は淹れられなかつた。また、食べられる野草への興味はこのあたりの体験から導かれたものかと想像した こうした古書も収集の範囲だ た

登山の古書に関して言うと、遭難事故があるとたいして詳細な事実経過と捜索などの報告書が作られるのが常なのだが これらはたいして古書価が非常に高い。それはその図書が凝った造りにな っていたり、ごく少数しか作られないことが原因なのだ 青木文庫には 『日本山嶽志』(明治三十九)という大部な豪華本もあ たはずである こうした事情は登山がかつては贅沢な趣味で その受容は豊かな者に独占されていたことに由来するんだとも聞かされた その時自分はそのうじ ないけどなという表情を浮かべていたことも記憶している

青木さんの人を引き付ける魅力は美術関係者に限ったことではなかつた。跡見女子大を退職して 那須に別荘を建てた 2LDK+書庫の建物で 練馬区南長崎の自邸から溢れた図書 資料を収めることが目的だ た このとき地元棟梁に建物の概要を説明して 普請を頼んだ その行き来のなかで棟梁と青木さんは かり意気投合して 仕事を離れて時々飲み交わすまでにな たというこ

とだ 書庫には増える資料を見越して 手動式のスチール製集密書架を入れた

しかし 奥さんと相談して、棟梁は いくら何でも世の中にそんなに本なんてあるもんじ ありません と書架を一連減らしてしま た そうだ 青木さんがその顛末を話すときには 世の普通人からすれば 自分の蔵書がけた外れに違ひなく、それはなかなか理解されないものだ と たいして怒るのでもなく やれやれ困ったもんだ」と嘆息して この話の最後を笑い飛ばして終わるのだ た やがて 図書は床に溢れて積まれることになり 資料も棚に何重にも積み重ねられることにな た ここまでくると 棟梁の想像をはるかに超える事態が現実のものとなり 書庫を目にした棟梁は こり 床下を見ないといけません と言ったとか 彼が恐れた通り 書庫はやがて中央が窪んで傾き、自動的に全部の書架が中央に集ま てきてしまい 開けるのに一苦労するようにな た しかし こうな た顛末も青木さんにかかると 棟梁が心配してたんだが 結局床がかしいじ たんだよな あはは という笑い話にな てしまつのだ た

ちなみに 青木さんが最初に建てた南長崎の自邸は書架のない家として婦人雑誌に紹介されたとのことだ た それは階段手摺の中や台所の棚の上などに書架が作り付けにな っていて 新たに家具として書架は付け加えなくていいという設計だ た そうだ しかし 小生が初めてお邪魔した時には居室には大きな木製書架があり 貴重書や喫緊のテマの図書や資料がぎ しり詰ま ており階段下の物置には那須に移動しないとけない図書がいつもかなり溜ま っていた

## 2 キ リア

青木さんは一九五四年に早稲田大学政治経済学部を卒業したのだが この頃

は日共活動家として政治活動に従事していたと思われる。五五年に日共は六全共でそれまでの武闘路線から合法活動に大きくシフトしたのだが、青木さんはこれに承服できない国際派だ。た、首都で蜂起するには、こことこことこの橋を爆破すれば完全に麻痺するんだから、と言っただがなあ」と何度か聞いたが、結局これは採用されなかつたよ。

奥さんに図書館司書の受講料を出してもらい、司書資格を取得してから、東京芸大に就職した。これはキ、リアとしてだ。たと、青木さんは自慢していたが、確認はしてない。芸大図書館の書庫に入り、ここにある全部の美術書に触ってやろう、と思ったそつだ。読むと言わないところが青木さんらしい。だから、芸大に就職するまでは美術史をテーマとして研究者となることは考えてなかつたはずである。ここでの青木さんの最大の仕事は東京芸術大学芸術資料館を立ち上げたことだ。た、同館は美術館ではなかつた。戦後新制大学となつた時に音楽学部と合わせて総合大学になつたのだから、美術と音楽にまたがる総合資料館を作ろうと考えたと語っておられた。しかし、芸大教員には互いを音校、美校と呼び合う体質が抜きがたく、なかなか総合的な収集、展示は実現できなかつたよ。うだ、「この昔に無くなつてしまつた学校にいまだにしがみついている」と慨嘆する仕儀となつた。しかし、一九七〇年から同館年報を発行し、図書館から分かれて展覧会を企画し、これと並行して所蔵品の確認、資料研究を始めることになつた。この成果は後に『東京芸術大学芸術資料館蔵品目録』全三十冊（一九八一年）としてまとめられた。日本の大半の美術館は公共施設であり、それまで収集も調査もできていないのが当然だ。た、新規に各地の美術史調査を始めれば、たいていは地域出身の若者が目指した東京美術学校にいきつく。この時期にはどの美術館もまだ所蔵目録を公にできていなかつたので、どうしてもこの目

録や芸術資料館所蔵品を調べなければならぬし、借りなければ展覧会が成り立たなかつた。自然、各地の学芸員が青木さんを次々と訪ねることになる。多くは駆け出しだ。た、学芸員の相手を続けることにうんざりしてきたのだから、毎日、やってくる学芸員をいび、て暮らすことになり、そういう自分に嫌気がさしてきたそつである。

そこに土方定一館長から鎌近で仕事をしなかつたかと誘われ、本人の回想ではまどいにまどい、たと述べているが、一九七二年に異動したのだ。た、青木さんが歌田眞介さんと読解し始めていた芸大図書館所蔵の高橋由一資料は大半が肉筆だ。た、青木さんの美術史研究者として特筆すべきはこの古文書読解能力にあつたろう。旧制中学卒業生であつたとしても、人並み以上に文字に親しんできた素地が生きてきたのであつた。奥さんの証言では、鎌倉に移ってから、それまで始終根を詰めて陰気な印象だ。たのが、開放的で朗らかになつたそつである。晩年までの語りや気さくな姿勢は鎌倉に移ってからのものであつたのである。土方館長はもう晩年に差し掛かつていて、あまり絞られたことはなかつた。た、聞いたが、ある時芸大の院生が鎌倉に来たのを見て、うちの学生だ、と言つたところ、監視の年かさの女子非常勤職員に、あなたはもう鎌倉に輿入れしたのだから、うちとは何ごとですか、と問い詰められ、絞られたと聞いた。鎌近は学芸だけでなく、永く勤めた非常勤職員も美術館への愛は深いのだと身に沁みたよつた。同時に青木さんには、明治以来の美術学校とその後身たる芸術大学への思いは人一倍強かつたのも事実である。

た、た、鎌近はメインとなる展示室での企画展だけでなく、二階の小さい展示室を別なテーマ展示に充てていた。このため、年間十本以上の企画展が開催されるのが通例だ。た、ここも他の館と同様に開設時に一通りの所蔵品を収集するこ

となく閉館したので 常設展示など望むべくもなか たのである。そもそも収蔵庫も荷解き室もなか た 従って、この学芸員の仕事は青木さんによれば「月刊誌の編集者のようなものよ」と形容された 恐らく年齢とともに 展覧会業務の激務に疲れてきたのであろう 一九八九年に跡見女子大学に誘われ、異動したのだ た

### 3 学風

東京芸大 鎌近と組織に所属して仕事をしながら 学的な蓄積を深めてきたが 跡見女子大に移ってようやく「小閑」を得たようで 我々が恩恵を被った数多くの業績はこの時期に公にされた それ以前には、むしろ自らの研究を近代アカデミズム風に自らの研究者としての立場を固めるために独占しようとしなかった。歌田さんが青木さんにどうしてそんなに簡単に重要な資料を貸してしまっのかと尋ねたとき 青木さんは何倍にもな て返ってくるから心配しなくていいのだと返事したという 実際に多くの研究者がそのように多くの恩恵に蒙ってきた。

矢田一嘯のパノラマ油絵が靖国神社遊就館で見つかり その重要さを認めたと同館は修復して展示した これにちなんで 明治美術学会がパノラマ油絵をテーマに靖国神社でシンポジウムを開く際に、学会理事はそろ て公式参拝を求められた。青木さんの政治活動歴を知るある理事はどうなることかと心配したらしいが 青木さんは神妙に参拝したそつである 青木さんにと て 日本の近代美術は政治的信条を上回る興味対象だ たよつだ 青木さんは明治美術学会の信条を ゆるやかな連帯 と形容したことがあるが この言い方は六〇年代末の新左翼がよく使った表現で 青木さんは左右どちらにも寛容だ たことに

なるかもしれない しかし 青木さんはただ気安いばかりでもなか た 公立館に収蔵されたのに全然公にならない浅井忠日記や吉園コレクシ ンの佐伯祐三贋作裁判などに見られるように 自らの信するところは全く変えようとしないのであ て、その信念を貫くについては人一倍頑固だ たと思う。

青木さんにはよく調べる者が同じように苦心惨憺する者をかぎ分ける嗅覚のようなものが備わ ていたのではなかつかと思つ 恐らく、それは直に作品資料に接することによ てしか得られない感覚を共有する者への共感なのではないか 遠隔地の図書館から請求して得た資料の 次のペ ジにも と面白いことが書いてあ たらどうするの というのが青木さんの常に繰り返した口癖であ た 実際に手に取らないで どうして求める情報が得られるのか 我々が常にモ トとしなければならぬことを青木さんは数十年続けるなかで体得し伝えたか たのだと思つ また 招かれた山荘で宴果てたのち 深夜に机に向かつてペ ジを繰る姿を目撃することはしばしばあ た 日頃の研究に取り組む姿勢は人一倍強い意志によ てのみ可能としていたのだと納得させられた こうした一つの人格が我々の身近を伴走することで得られたものをもはや感じることができなくな たのは全く痛恨の極みというより他はない とても青木さんほどの努力を積み重ねることのできない我が老生だが せめてその偉功を常に振り返らねばならないと念じている。それが青木さんの学恩に報いる唯一の応えだと思つからである